

バドルッディーン・アイニーの職業的キャリア

——マムルーク朝ウラマーの一事例（2）——

中 町 信 孝

1. はじめに

マムルーク朝時代を代表するウラマー（知識人）のひとりであるバドルッディーン・アイニー（Badr al-Dīn al-'Aynī, 1361-1451）について、前稿ではその学問的キャリア、すなわちアイニーがいつ、どこで、誰から、何を学んだかを分析した¹⁾。その結果、彼が地縁や法学派のネットワークを用いつつ知識人としての地位を高めていく過程が明らかになったが、その反面、従来の研究が指摘してきたような、支配エリートと良好な関係を取り結ぶことでアイニーが自らの政治的・社会的な地位を上昇させていた様は、彼の前半生においては確認することができなかった。そこで本稿では、アイニーのおもに後半生における職業的キャリアを分析し、そこに支配エリートとの関係がどのように関わっていたかを明らかにする。

本稿第2章、第3章ではアイニーの「手当付きの職(mansab)」の経歴を検討するが、その際にワクフにおける役職と政府における官職の2つに大別して論じる。前者は学問・教育の伝達に関わる職業として、マドラサ（学院）・ハーンカー（道場）などの教育・宗教施設において任命される役職であり、その賃金は各施設のワクフ財源から支払われるが、それに対して後者は政府が任じる官僚職・法務職であり、政府から賃金が支払われる。アイニーを「師(shaykh-nā)」と仰ぐサハーウィーは、アイニーの伝記記事において、「彼より前に（大）カーディー職とムフタスイブ職、アフバース監督職が一時に兼任されたことはない」[Tibr: 3/145; Daw': 10/133]と記し、アイニーのたぐいまれな栄達ぶりを讃えているが、これら3職の兼任が具体的にどのような時期に達成されたものであったのかも検討する。そして第4章ではそれらのキャリアと、アイニーの保持した支配エリートとの関係がどのようにかかわっていたのかを具体的に考察する。

本研究はまた、筆者が続けているアイニーの年代記に関する歴史文献学研究に向けて、その基礎となるデー

タを提供するものでもある²⁾。さらに近年、ハディース学におけるアイニーの功績に注目する諸研究が発表されており、そのような関心からも、アイニーのライフコースを整理しておくことには大きな意味があると考える³⁾。

なお、本稿が依拠する史料については、前稿を参照されたい⁴⁾。

2. ワクフにおける役職

ザーヒリーヤ学院のハーディム頭

初めてエジプトの地を踏んだアイニーが、サイラーミー長老の庇護のもとでザーヒリーヤ学院におけるスーフイー（寄宿学生）となったのは、前稿で述べたとおりである。そしてほどなく「ハーディム頭(khādim khuddām-him)」に任命され、これがアイニーにとっての最初の「手当付きの職」となった。その経緯についてアイニーは、当時長老から「お前は私の代理のようなものであり、ハディースについて私の持っているものすべてを持っている」[Badr/S: 138a]と言われたことを述懐しており、アイニーのハディースに関する知識が評価されたことがうかがえる。

ザーヒリーヤ学院については創設時のワクフ文書が現存しており、その内容からこの役職に関する詳細が明らかになる⁵⁾。文書に記された同学院の役職を【表1】にまとめた。この学院では計125人の学生が月20ディルハム、60人のスーフイー(al-ṣūfiyya)が月10ディルハムの給金を受け取っていたが、「そのスーフイーのうち、善良で公正なる者1名を、ハナフィー法学派のシャイフと学生とスーフイーのためのハーディム(khādim li'l-shaykh al-ḥanafī al-madhab wa-li'l-ṭaraba wa-li'l-ṣūfiyya)」に任命し、その者にはスーフイーの給金に上乘せして、月30ディルハムを支払うよう規定されていた。文書中には「ハーディム頭」なる名称は使われていないが、アイニーが任命された役職はこれに該当すると見てよいだろう。つまりアイニーはこの時、他のスーフイーたちの4倍の給金を受け取ることになっ

【表1】 ザーヒーヤ学院の役職一覧

	役職名	定員	月給 (dirham nuqra)
1	ハナフィー派長老 (教授)	1	500
2	ハナフィー派学生	40	20
3	シャーフィイー派長老	1	300
4	シャーフィイー派学生	20	20
5	マーリク派長老	1	300
6	マーリク派学生	20	20
7	ハンバル派長老	1	300
8	ハンバル派学生	20	20
9	ハディースの長老	1	150
10	ハディース学生	15	20
11	クルアーン読誦の長老	1	100
12	クルアーン読誦学生	10	20
13	スーフィー (寄宿生)	60	10
14	南側広間の礼拝のイマーム	1	+70
15	墓廟での礼拝のイマーム	1	+30
16	礼拝呼びかけ人	1	+15
17	スーフィーの世話人	1	+30
18	敷物の世話人	1	+10
19	クルアーン管理係	4	+10
20	出欠係	1	+15
21	長老たちの出欠係	1	+5
22	図書係	1	+15
23	掃除係	6	+15
24	水係	1	+15
25	用務員	2	+15
26	門番	1	+15
27	クルアーン読誦係	10	+5
28	預言者賛歌係	1	+10
29	医者	1	+15
30	眼科医	1	+15
31	調理人	1	+20
32	道具係	1	+10
33	管理人	1	+15
34	伝令	1	+15

※14~34は、スーフィーの中から選ばれる。

た。アイニーが師サイラーミーから優遇されていたことを示す事例である。この後、790/1388年にインターブに一時帰郷するまでこの職に留まっていたのは、前稿で見たとおりである⁶⁾。

教授職

この後、アイニーが就いた役職としては、ナーシル・ファラジュ期 (al-Nāṣir Faraj, 1399-1412) のマフムデーヤ学院 (al-Madrasa al-Maḥmūdiyya) の法学教授職 (tadrīs al-fiqh) と、ムアイヤド・シャイフ期 (al-Mu'ayyad Shaykh, 1412-1421) のムアイヤディーヤ学院 (al-Madrasa al-Mu'ayyadiyya) のハディース学教授職が、サハーウィーによって記録されている

[Tibr: 3/144; Daw': 10/132-133]。前者については、アイニーの在任はファラジュ期に限られると見てよいだろうが、ファラジュの在位年代からすると、この職は上記のハーディム頭職解任から10年近くたった後での就任となるため、この2つの職の間の直接的な関係は見いだせない。後者は822年5月17日/1419年6月11日に就任し、晩年まで在任し続けたとある [Khīṭāṭ: 4/346]。

マフムデーヤ学院については創設時のワクフ文書は現存せず、蔵書の奥付に付されたワクフ設定文がいくつかの写本に見られるのみである⁷⁾。一方のムアイヤディーヤ学院はシャイフが設定したワクフ文書が現存し、そこから役職の詳細情報が分かる⁸⁾。この学院は学生数175名の大規模な教育施設であり、アイニーの就いたハディース学教授の職は20名の学生を担当し、月給の額では、スーフィー長老を兼ねていたハナフィー派教授職に次ぐ150ニスフを受け取る高い地位であった。

これら2施設での役職は、アイニーの知的活動にも大きな意味を持ったと考えられる。マフムデーヤ学院にしるムアイヤディーヤ学院にしる、当時のカイロでは有数の蔵書施設であったからである。マクリーズィーは、マフムデーヤ学院に関しては「ここには書庫 (khizānat kutub) があり、それに匹敵するのは今日エジプトにもシリアにも知られていない」と述べており、またムアイヤディーヤ学院に関しては、かつて城塞に収蔵されていた各種の書物が移管されていたとある⁹⁾。この時代、蔵書機関としての役割を担っていた学院の多くでは、保証金などとの交換を条件に本の貸し出しを認めていたが、これら2学院に関わるワクフ文書には、それぞれいかなる場合にも外部者への貸し出しを認めないと規定されていた¹⁰⁾。いわばアイニーは、豊富なコレクションを持ちながらも排他的な決まりを持つ2つの蔵書機関に、内部者としてアクセスできる特権的な資格を得ていたと言うことになる。

バドリーヤ学院の創建

また、アイニーは自らのラクブを冠したバドリーヤ学院 (al-Madrasa al-Badriyya) を建造したことが知られている¹¹⁾。この学院の建造について、奇妙にもアイニー自らは自著中で何も書き残していないが、アイニーの弟であるシハーブッディーン・アイニーによる写本欄外書き込みによると、814年9月1日/1411年12月16日がその完成年月日であり、ナーシル・ファラジュ期の末期にあたる事が分かる¹²⁾。その後同学院には、

ムアイヤド・シャイフによって「黄金のドーム (al-qubba al-mudhahhaba)」が増築されたとの記述があり、またシャイフが設定したワクフ文書には、同学院に対して年額2500ニスの支援金が支払われるよう規定されている¹³⁾。この学院が建造後徐々に規模を拡大させていった様子がうかがえる¹⁴⁾。

この学院での教育活動について、アイニーがどのような形で関わっていたのかを示す情報はきわめて少ない。たとえば、アイニーによる自筆本のタイトル頁には「バドリーヤのワクフ (waqfiyya al-Badriyya)」との書き込みがなされており、アイニーの著書がこのマドラサに常備されていたことがうかがえる¹⁵⁾。また、アイニーの弟シハーブディーの自筆本に付されたワクフ設定文には、それらの本を所定の時刻にバドリーヤ学院にて読誦するよう定めた文言が見られる¹⁶⁾。このように、バドリーヤ学院では何らかの形の知的伝達が恒常的に行われていたことは確かであり、アイニーはその行為に携わることの見返りとして、自らやスルターンが設定したワクフから収入を得ていたことがうかがえるのである。

3. 官職

カイロでの任官以前

政府による官職としてアイニーが初めて任命されたのは、793/1391年、ダマスカスにおけるムフタスイブ職であった [Badr/S: 197b-198a]。この官職は、後述するダマスカス総督 Sūdūn al-Ṭuruntāy の在任中に与えられたものと見られ、さらにアイニーによる Sūdūn の死亡録中には、彼が生前、アイニーをダマスカスの大カーディーとすることを計画していたとの記述もある [Badr/S: 198b]。ムフタスイブ、大カーディーともに、アイニーがのちにカイロで就任する官職であり、ダマスカス滞在中のアイニーの活動には彼のその後の職業的キャリアを方向付ける要素がすでに含まれていたと見ることができよう。

ムフタスイブ

801/1399年のムフタスイブ職への任命が、アイニーにとってカイロにおける最初の官職であった。ムフタスイブとは「市場監督官」とも訳され、都市経済の監督や風紀の維持を管轄する政府の役職の1つである。マムルーク朝におけるムフタスイブについては菊池忠純の専論があり、マムルーク朝時代においてムフタスイブに就任したすべての者の経歴の分析から、同職の時期ごとの傾向が詳しく考察されている。この研究に付

されたムフタスイブ就任者のリストによると、アイニーは通算で8回ムフタスイブ職に就いたとされるが、アイニー自著中の記述からもそのことは裏付けられる。【表2】にアイニーのムフタスイブ職在任期間と、自著中の対応箇所を挙げる¹⁷⁾。

【表2】ムフタスイブ職在任期間

	就任日と解任日 (ヒジュラ暦/西暦)	自著中の記述
1	801年12月1日/1399年8月3日	<i>Iqd/Ah</i> : 19/26a; <i>Badr/BN</i> : 23b
	802年1月1日/1399年9月2日	<i>Iqd/Ah</i> : 19/30a; <i>Badr/BN</i>
2	802年4月14日/1399年12月13日	<i>Iqd/Ah</i> : 19/33a; <i>Badr/BN</i> : 29a
	802年4月16日/1399年12月15日	<i>Iqd/Ah</i> : 19/34a; <i>Badr/BN</i> : 30a
3	803年4月14日/1400年12月1日	<i>Iqd/Ah</i> : 19/48b; <i>Badr/BN</i> : 43b
	803年6月7日/1401年1月22日	<i>Iqd/Ah</i> : 19/49b; <i>Badr/BN</i> : 44b
4	819年1月15日/1416年3月14日	<i>Iqd/Q</i> : 1/255; <i>Badr/BN</i> : 116a
	819年3月14日/1416年5月11日	<i>Iqd/Q</i> : 1/257; <i>Badr/BN</i> : 116b
5	825年8月21日/1422年8月9日	<i>Iqd/Q</i> : 2/184, 245; <i>Badr/BN</i> : 165b
	829年2月15日/1425年12月26日*	<i>Iqd/Q</i> : 2/294
6	833年4月4日/1429年12月30日	<i>Iqd/Q</i> : 2/373, 399
	835年7月1日/1432年3月3日	<i>Iqd/Q</i> : 2/418
7	844年3月8日/1440年8月6日	<i>Iqd/Q</i> : 2/559
	845年3月3日/1441年7月21日	<i>Iqd/Q</i> : 2/569, 570
8	846年10月27日/1443年2月27日	<i>Iqd/Q</i> : 2/585
	847年2月12日/1443年6月10日	<i>Iqd/Q</i> : 2/591, 594

*菊池前掲論文 p. 164 には829年1月1日 (1425年11月12日) との日付がある。

これらのうち、1, 2, 3回目の在任はナーシル・ファラジュ期に相当するが、それぞれ1ヶ月、2日、2ヶ月と期間が短い。菊池によれば、この時期は特にムフタスイブ職を巡って賄賂が横行し、頻繁にムフタスイブが交替させられた時期であったという¹⁸⁾。アイニーが最初にムフタスイブに就いた際にも、「人々が彼のために働きかけた (sa'ā la-hu)」 [Tibr: 3/142] あるいは「(アミール) Jakam が彼のために働きかけた (sa'ā Jakam la-hu)」 [Daw': 10/132] と伝える史料がある。しかし、アイニー自著中では自らの就任の際の「働きかけ」については触れておらず、逆に自身が罷免される際の記述では、「(アミール) Aytamish¹⁹⁾ のダワーダールである Kuzul の仲介 (sifāra) によってであり、[後任の] al-Ṭunbadī は就任に際し、彼 (Kuzul) に賄賂 (rishwa) を払った」 [Iqd/Ah: 19/30a]、または「(アミール) Yalbughā の仲介による」 [Badr/BN: 44b] 等と述べている点は興味深い。ここには、実際はどうであれ、働きかけや仲介によって官職を得ることを良しとしない倫理観が垣間見える。いずれにせよ、ファラジュ治世の初期においては、有力アミールたちがムフタスイブ職の任免に大きな影響力を持っており、アイニーもその渦中にいたことがうかがえるのである。

2回目の在任期間が2日間と非常に短いのは、アイニー自身の言明によれば、有力アミールの *Sūdūn al-Dawādār*²⁰⁾ が、政敵の *Aytamish* から没収した小麦を不正に高値で売ろうとしたことを、アイニーが潔しとせず辞任したためであった。そして、*Sūdūn* がその目的にかなうために新たにムフタスイブに就任させたのは、歴史家のマクリーズイーであったとも述べている [*Iqd/Ah*: 19/34a]。マクリーズイーは、アイニーのムフタスイブ就任によって同職を罷免させられた人物であり、この時期の同職を巡る争いを契機にして両者の確執が生まれたことについては、多くの研究が指摘するとおりである²¹⁾。

3回目のムフタスイブ職罷免のあと、しばらくはこの職に就かなかったアイニーだが、ムアイヤド・シャイフ治世の半ば頃に、スルターン直々に就任要請を受ける。当時のカイロは物価高の最中にあり、シャイフはムフタスイブだったアミール *Tāj* を罷免し、自らがムフタスイブ業務を行うという異常事態にあった²²⁾。そこで、すでにムフタスイブ職就任経験のあるアイニーに同職を委ねたという²³⁾。しかし、こうして4回目のムフタスイブ職に就任したアイニーに対して、後任となる *Ibn Sha'bān* が書記長 (*kātib al-sirr*) の *Ibn al-Bārīzī*²⁴⁾ に賄賂 (*rishā*) で働きかけ、アイニーを罷免させようと動き出した。そこでアイニーは自らムフタスイブ職を辞任し、それに代わって後述するアフバース監督官に就任したため、結果としてこの時のムフタスイブ職在任期間も2ヶ月間と非常に短期間に終わった。

また、上のリストには現れないが、シャイフ期の823/1420年には、アイニーにとってもう一度ムフタスイブ職に就くチャンスが訪れた。この時も、スルターンのシャイフが直々にアイニーをムフタスイブに就ける旨を語ったと言うが、書記長の *Ibn al-Bārīzī* の働きかけにより、彼の推す *Ibrāhīm b. al-Ḥusām* が就任している [*Iqd/Q*: 380-381; *Badr/BN*: 143b-144a]。

5回目と6回目の就任はアシュラフ・バルスバリー *al-Ashraf Barsbāy* 期 (在位1422-1438) のものであり、それぞれ3年半と2年2ヶ月と、在任期間も比較的長期にわたる。また、通常カイロと下エジプトを管轄する「カイロのムフタスイブ」と、フスタートと上エジプトを管轄する「フスタートのムフタスイブ」は別々の人物が就任するものであったが、この時のアイニーは「カイロ」と「フスタート」の双方を管轄するムフタスイブであり、通常よりも幅広い権限を有していた²⁵⁾。特に5回目の在任時には、828年12月/1425年

10月に民衆騒動が起こり、アイニーはムフタスイブとして民衆からの激しい批判にさらされることとなったが、これについては後述する。

なお、アイニーが、ザーヒル・ジャクマク期 (*al-Zāhir Jaqmaq*, 1438-53) にも2度ムフタスイブ職を任されている点にも注目したい。どちらも短い在任期間ではあるが、「カイロ」と「フスタート」の双方を管轄していたと見られる。これらの任命の理由については不明だが、すでに80歳を越えていたアイニーが、ジャクマクとの間にも信頼関係を取り結ぶのに成功していたと見て良いだろう。

アフバース監督

アフバース (*aḥbās*, 単数形はフブス *ḥubs*) とは、アウカーフ (*awqāf*, 単数形はワクフ *waqf*) と同義とされる、寄進財産を意味する用語である。マムルーク朝ではアフバース庁 (*dīwān al-aḥbās*) とアウカーフ庁 (*dīwān al-awqāf*) が存在し、それぞれがナーズイル (*nāzir*) と呼ばれる監督官によって統率されていた。「フブス」と「ワクフ」の語の意味が共通することから、従来の研究ではこれら2つの官庁、および監督官職は、同一のものにとらえられることが多かったが、伊藤隆郎は両役職を兼任する者が史料上から確認できないとの事実から、これらの両官庁は別個の異なる官庁であることを指摘し、さらに法学書を用いて両官庁の管轄の違いを明らかにした²⁶⁾。

伊藤の研究ではアフバース、アウカーフの監督官職に就任した者のリストを掲載しており、アイニーがアフバース監督職に2度就任していることが確認できる²⁷⁾。アイニーの自著中からもそのことは裏付けられ、その就任期間は【表3】のとおりである。

【表3】アフバース監督官在任期間

	就任日と解任日 (ヒジュラ暦/西暦)	自著中の記述
1	804年4月14日/1401年11月20日	<i>Badr/BN</i> : 55b
	804年11月24日/1402年6月24日	<i>Badr/BN</i> : 56a-b
2	819年3月27日/1416年5月24日	<i>Badr/BN</i> : 116a-b, 134b, 155b, 161b
	853/1449, 50年	(<i>Tibr</i> : 3/145; <i>Ḍaw'</i> : 10/133)

最初にアイニーがアフバース監督官となったのは、ナーズイル・ファラジュ期においてであり、その在任期間は半年ほどであった。この時の就任に至ったいきさつや、在任中の職務内容などは不明である。2度目の就任は、シャイフ期の819/1416年であり、4度目のムフタスイブ職からの辞任後、まもなくのことであった。この時の就任は上述のとおり、スルターンのシャイフとの結びつきによるものが大きいと見られる。その後、スルターンの代替わりによってもアイニーはこ

の職に留まり続け、最終的にこの職を罷免されたのは任命から34年目、853/1449、50年のことである。

ところで、バルスバーイ期の826年10月23日/1423年9月23日には、次のような記述がある。

スルターンはこの著者を呼び、エジプトのアウカーフ (awqāf al-ashraf) の監督職への就任を提案したが、著者はそれを断った。[‘Iqd/Q: 2/95; Badr/BN: 158b]

この時点ではアイニーは、アフバース監督官の地位に就いているため、ここで述べられるのはアウカーフ監督官就任への打診である。上述のとおり、アフバース庁とアウカーフ庁とが当時明確に区別されていたことが、このような記述からも裏付けられる。

大カーディー

マムルーク朝では、スンナ派の4法学派からそれぞれ1人ずつ大カーディー (qādī al-quḍāt) が任命される体制が確立した。エジプトにおける大カーディーは、それぞれの法学派の司法組織における頂点であり、広くウラマーを代表する存在でもあった。アイニーは、彼の属するハナフィー派のエジプト大カーディーとなったが、その在任期間は【表4】のとおりである。

彼の大カーディー就任は2回、いずれもバルスバーイ期においてである。後期マムルーク朝の大カーディー就任者の経歴を分析した伊藤隆朗が指摘するとおり、

【表4】 ハナフィー派大カーディー在任期間

	就任日と解任日 (ヒジュラ暦/西暦)	自著中の記述
1	829年4月26, 27日/1426年3月6日	‘Iqd/Q: 2/297, 309
	833年2月26日/1429年11月23日	‘Iqd/Q: 2/372
2	835年6月26日/1432年2月28日	‘Iqd/Q: 2/418, 425, 479
	842年1月14日/1438年7月6日	‘Iqd/Q: 2/510

アイニーの同職就任にはバルスバーイとの個人的な結びつきが大きな要因となっていることは明らかであろう²⁸⁾。また、アイニーの1回目の罷免の際には、当時シャーフィイー派の大カーディーであった歴史家のイブン・ハジャルも同日に解任されているが、それについてはアイニー自著中に以下のような記述がある。

敵対者たち (al-a‘dā’) のある者がアシュラフ王 (バルスバーイ) のもとで、この2人 (アイニーとイブン・ハジャル) のカーディーは争いを続けており協力することがなく、両者の間ではムスリムたちの利益が失われると [言って] 働きかけた。彼らはこのような偽りごとしか、この著者を罷免させる手段を見いださなかったのである。[‘Iqd/Q: 2/372]

アイニーとイブン・ハジャルという2人の歴史家間の確執についてはよく知られているが²⁹⁾、ここでは引用の冒頭にある「敵対者」について注目したい。この「敵対者」とは、この時アイニーに代わって大カー

【表5】 アイニーの就いた役職・官職年譜

スルターンと在位年	ワクフでの役職	ムフタスイブ	アフバース監督	大カーディー
ザーヒル・バルクーク (1382-1399)	ザーヒリーヤ学院 ハーディム頭 1386~1388			
ナーシル・ファラジュ (1399-1412)	マフムディーヤ学院 法学教授 ? (バドリーヤ学院完成) 1411. 12. 16	1399. 8. 3~9. 2 1399. 12. 13~12. 15 1400. 12. 1~1401. 1. 22	1401. 11. 20 1402. 6. 24	
ムアイヤド・シャイフ (1412-1421)	ムアイヤディーヤ学院 ハディース学教授 1419. 6. 11	1416. 3. 14 1416. 5. 11	1416. 5. 24	
ザーヒル・タタル (1421)				
アシュラフ・バルスバーイ (1422-1438)		1422. 8. 9 1426. 1. 5 1429. 12. 20 1432. 3. 3		1426. 3. 6 1429. 11. 23 1432. 2. 28 1438. 7. 6
ザーヒル・ジャクマク (1438-1453)	?	1440. 8. 6 1441. 7. 21 1443. 2. 27 1443. 6. 10	1449, 50	

ディーの地位に就いた al-Tafahni³⁰⁾ らのことであろう。al-Tafahni はアイニーの2度の就任の際の前任者でもあり、この2人はハナフィー派大カーディーの地位を巡るライバル同士であったと言える。そのため両者の間には確執が生じていたと考えられ、アイニー自著中での al-Tafahni への死亡録には、「彼はこの著者によって2度 [大カーディー職を] 罷免させられ、彼の心中には彼自身を焼く炎が生じ、様々な病によって衰弱して死に至った」[*Tqd/Q*: 2/423] と述べられている。

以上に見た、アイニーの就任した役職・官職の在任期間の一覧を【表5】に挙げた。この表から明らかのように、アイニーはファラジュ治世の初期にムフタスイブ職とアフバース監督職を何度か勤めた後、14年間にわたっていかなる官職にも就いていない時期が存在する³¹⁾。この不遇の時期の後、シャイフ治世に再びムフタスイブ職に任じられて以降は、晩年まで途切れることなく官職に就いているのである。

ここで、冒頭に述べた3職の兼任について見てみよう。彼が実際に3職を兼任していた時期を見るならば、6期目のムフタスイブ職、2期目のアフバース監督職、2期目の大カーディー職が重なる、835年6月26日/1432年2月28日から835年7月1日/1432年3月3日にかけてのわずか5日間に過ぎないことが分かる。さらに、6期目ムフタスイブ職の罷免に関するアイニー自身の記述をみると、「*Ṣalāḥ al-Dīn Ibn Naṣr Allāh* に、この著者に替わって (*iwaḍan ‘an musaṭṭiri-hi*) カイロのムフタスイブとして名誉の外衣が賜された。彼 (著者) が [大] カーディー職に異動した (*intiqāli-hi*) ためである」[*Tqd/Q*: 2/418] とあり、両職が兼任されていないように描かれているのである。ここから、3職兼任の事実はほとんど実態の伴わないものであったことが明らかとなる。

4. 支配エリートとの関係

次に、アイニーが支配エリートとの間でどのようなつながりを持っていたのかを分析しよう。

スルターンたちとの関係

まず注目すべきは、アイニーはその生涯において、すくなくとも3人のスルターンのために伝記を執筆しているという点である。サハーウィーらが伝えるアイニーの著作リスト中には、ムアイヤド・シャイフ、ザーヒル・タタル (*al-Zāhir Ṭatar*, 在位1421), アシュラフ・バルスバーイの3人それぞれについての伝記が挙げられており、そのうちバルスバーイを除く2人の伝

記が現存している³²⁾。これらの伝記は時の支配者に献呈することを目的として執筆されたものであり、スルターンたちとアイニーとのパトロン＝クライアント関係の存在を指摘することができる³³⁾。

これら3人以前にも、アイニーとスルターンとの関係は記録されている。まずアイニーは795/1392-93年、バルクークと面会したとの記述があるが、それは上に見たダマスカスでの任官のあとの出来事だった [*Badr/S*: 205a]。続くファラジュの治世には、ムフタスイブに3回、アフバース監督に1回任命され、マフムディーヤ学院の教授職にも任命されているものの、このようなアイニーの昇進は、ファラジュとの関係によると言うよりは、後述する Jakam のようなアミールとの関係によるところが大きい。むしろファラジュ治世には、アイニーはしばらくの間官職から遠ざかっていた時期が続いていることを指摘しておこう。

その後アイニーが再び官職に就くのは、ムアイヤド・シャイフの治世5年目に当たる819/1416年、アイニーにとって4度目のムフタスイブ職任命以降であった。サハーウィーが「(アイニーは) 彼の治世の最初に試練を受けたが (*umtuḥina*), その後彼の親友 (*akhiṣā'*) にして側近 (*nudamā'*) の1人となった」[*Daw'*: 10/132] と語るとおり、アイニーはこの時期、ムフタスイブ職、アフバース監督職、ムアイヤディーヤ学院教授職を歴任する。さらにアイニーは823年3月18日/1420年4月1日から7月25日/8月4日にかけて、カラマン侯国のコニア Qunya へと遣わされているが、この抜擢はアイニーの有するトルコ語能力やアナトリア地方に関する地理的知識によるものであろう [*Tqd/Q*: 1/377; *Badr/BN*: 143b]。上述した、シャイフがバドリーヤ学院をワクフ対象として設定したことも、両者の良好な関係を物語っている³⁴⁾。またシャイフに対してアイニーは、上記とは別に韻文による伝記も著していることが伝えられるが、そのテキストは失われている。

次にアイニーと関係のあったスルターン、ザーヒル・タタルの短い治世においては、アイニーにとって新しい任命はなかった。しかし、アイニー自著中のタタルの死亡記事には「トルコ語を重んじる思いの強さから、彼は私に対し、アブー・ハニーファの法学に関するクドゥーリーの書 (*Kitāb al-Qudūri*) を、少しも意味を変えずに、構成も変えずに、トルコ語で書き直すよう指示した」[*Badr/BN*: 152b] とある。このようなタタルの指示がいつ下されたのかは不明であるが、ここではアイニーのトルコ語能力が、スルターンとの

個人的な結びつきに欠かせない要因となっている。

さて、アイニーの生涯でもっとも影響力の大きかったパトロンは、アシュラフ・バルスバーイであろう。彼の治世においてアイニーは、一方でシャイフ期以来のアフバース監督職に留任しながら、他方でムフタスイブ職と大カーディー職にとぎれることなく在任していた。また836年7月20日/1433年3月11日から837年1月20日/1433年9月5日にかけてアイニーは、ハナフィー派大カーディーとしての資格でバルスバーイのアーミド・Āmid 遠征に随行している³⁵⁾。その他、アイニー自著中には、彼がバルスバーイの宮廷にしばしば参列しており、スルタンの御前で行われるハディースの朗誦を聞いていたことなどが記されている [Iqd/Q: 2/236; Badr/BN: 164a;]。

このような両者の親密さは、当時の歴史家たちの間でも広く知られていた。特に、アイニーがバルスバーイの御前で歴史講話を行っていたことについては、多くの同時代史料において指摘されている。マクリーズィーは、アイニーが第5回目のムフタスイブ在任時に起こった食料騒動に際し、バルスバーイが慣例に反し、ムフタスイブを解任することなく武力で騒動を鎮圧した事件をとらえて、「(バルスバーイはアイニーに) 目をかけていた。というのも彼は夜ごとに彼のために、諸王の歴史を読みあげ、それをトルコ語に翻訳していたからである。」 [Sulūk: 4/698] と記している。イブン・ハジャルもまた、「彼には大歴史書があり、アシュラフ王のもとで読誦 (qirā'a) するため参上し、恩恵をこうむった」 [Raf': 432] と伝える。サハーウィーによるアイニーの伝記には、このように書かれている。

アシュラフがスルターン位に就くと彼を友とし寵愛し (ṣaḥība-hu wa-khaṣṣa bi-hi), 自らのもとの彼の地位を上げてやり、その間 [アイニーは] 彼の夜とぎをする (yusāmīr) ようになり、アラビア語で編纂した歴史書を彼のために読みあげ、それから、2言語で提供するために、彼のためにトルコ語で解説し、信仰の諸事を彼に教えるようになった。ついにはアシュラフ王が「もし彼がなければ我らのイスラームに何があったであろうか」と言うまでになったといわれた。 [Tibr: 3/143; Daw': 10/132]。

2言語による歴史解説についてはイブン・タグリービルディーも伝えており、彼はバルスバーイが「インタービー (アイニー) なかりせば、我らムスリムたりえず」と言うのを自ら聞いたという [Manhal: 11/195]。ただし、イブン・タグリービルディーは、バ

ルスバーイが「王国の諸事に彼 (アイニー) を介入させることは決してなかった。それどころか、歴史や人々の戦い、およびそれに類することの講話以外には、彼 (アイニー) を会議の場に座らせることはなかった」³⁶⁾ と記し、バルスバーイ期にもアイニーが政治には不介入であったことを強調する。いずれにせよ、アイニーとバルスバーイとの親密な関係においては、歴史書の執筆と読誦という行為が重大な意味を持っていたことが指摘できるのである³⁷⁾。

ところで、バルクークの後にスルターン位に就いたザーヒル・ジャクマクについては、先行研究でもアイニーとの間の個人的関係はあまり注目されてこなかった。たしかにジャクマク治世はアイニーにとっての晩年に当たり、サハーウィーはこの時期のアイニーが自宅での編纂・執筆活動に専念していたと伝えている [Daw': 10/133]。しかしその一方で、アフバース監督職には留任し、ムフタスイブ職にも新たに2度任命されており、アイニーがジャクマク治世においても一定の地位を保ち得ていることは留意すべきであろう。

これに加えてアイニーは、ジャクマクに対しても伝記を執筆していたとも考えられる。アイニーによるジャクマク伝の存在は、サハーウィーによる著作リストには含まれていない。しかしフランス国立図書館所蔵のArabe 5818 写本は、アイニーによる *Sīrat al-Malik al-Zāhir Maḥmūd Shāh Baybars* 『ザーヒル王マフムード・シャー・バイバルス伝』であるとされているが³⁸⁾、テキスト内容を検討するとこの「ザーヒル王」とは、トルコ人 (al-Atrāk) のうちの12代目のスルターンで、アシュラフという称号のスルターンに代わってヒジュラ暦841年に実権を握ったことが書かれている³⁹⁾。このようなザーヒル王はジャクマクのことに他ならず、私はこの書がアイニーによってジャクマクに捧げられた伝記であると推測するが、詳細な検討については他の機会に譲りたい。

以上、歴代のスルターンとの関係を見たが、これらのスルターンはバルクークとファラジュの父子を除くと、いずれもバルクークの子飼いまムルーク、ザーヒリーヤ軍団の出身者であることを確認しておく。

アミールたちとの関係

サハーウィーによるアイニーの死亡記事中には、4名のアミールがアイニーと懇意であったとして記載されているが [Daw': 10/132]、それ以外にも、アイニーの自著の中で個人的な関係をうかがわせる記述のあるアミールもいる。それらをまとめたのが【表6】である。

【表6】アイニーと関わりのあった支配エリート

	人名 (没年)	出身軍団	位階・官職	アイニーとの関係	典拠	*1	*2
1	Jarkas al-Khalīlī (d.1389)	Yalbughā -wiyya	100人長 厩舎長官	スーフィー時代の庇 護者、のち抑圧者	<i>Badr/S</i> : 171b; <i>Sulūk</i> : 3/685; <i>Inbā'</i> : 2/366-367; <i>Manhal</i> : 4/205-207		○
2	Sūdūn al-Ṭuruntāy (d. 1392)	Zāhiriyya	100人長 シリア総督	ダマスのムフタスイ ブに任命	<i>Badr/S</i> : 198a-b; <i>Sulūk</i> : 3/776; <i>Manhal</i> : 6/110-111		○
3	Jakam min 'Awḍ (d. 1406-07)	Zāhiriyya	100人長 大ダワーダール	ムフタスイブに斡旋	<i>'Iqd/Q</i> : 86b; <i>Badr/BN</i> : 80b; <i>Sulūk</i> : 4/46; <i>Manhal</i> : 4/313-324; <i>Daw'</i> : 3/76	○	○
4	Qalmaqāy al-'Uthmānī (d. 1398)	Zāhiriyya	100人長 大ダワーダール	バルクークに紹介	<i>'Iqd/Ah</i> : 19/15a; <i>Badr/BN</i> : 10b; <i>Sulūk</i> : 3/912; <i>Manhal</i> : 9/98-100	○	○
5	Taghrībirdī al-Qurdmī (d. 1395-96)	Zāhiriyya	10人長		<i>Manhal</i> : 4/54; <i>Sulūk</i> : 3/864	○	
6	Tamurbughā al-Mashtūb (d. 1410)	Zāhiriyya	100人長	メッカ巡礼をともに する	<i>'Iqd/Ah</i> : 19/110b; <i>Sulūk</i> : 4/151; <i>Manhal</i> : 4/100; <i>Daw'</i> : 3/41	○	○
7	Shaykh al-Safawī (d. 1398)	Zāhiriyya	アミール・マジユ リス	<i>Tuhfat al-Mulūk</i> の 注釈を献呈	<i>'Iqd/Ah</i> : 19/28b-29a; <i>Badr/BN</i> : 25b; <i>Sulūk</i> : 3/975; <i>Manhal</i> : 6/312-314; <i>Daw'</i> : 3/308		○
8	Arghūn Shāh al- Baydamurī (d. 1400)	Zāhiriyya	100人長, 同上	ハディースの講話	<i>Badr/BN</i> : 34b; <i>Manhal</i> : 2/303-304; <i>Daw'</i> : 2/267		○

※1 = サハーウィーのアイニー死亡記事中に記述のある者。

※2 = アイニーの年代記中に記載のある者。

その中で、アイニーに対して何らかの利益をもたらしたとの記述のあるアミールは、1, 2, 3, 4である。

1の Jarkas al-Khalīlī は、スルターン・バルクークと同じく Yalbughāwiyya 軍団出身のアミールであり、カイロ中心部に今日も残る大市場ハーン・ハリリー (Khān al-Khalīlī) の建造者としても知られる。アイニーがザーヒリーヤ学院での生活を送っていた頃、同学院の監督官の役にあった Jarkas は、100人長アミールの厩舎長官 (amīr ākhūr) としてバルクーク政権の中樞の地位を占める高位のアミールであった。この当時のアイニーと Jarkas との関係を伝える逸話として、アイニーはこのような記述を残している。

ある日、私は彼 (Jarkas) のもとで座してともに語らっていたが、1人の ḥaydarī の物乞いが現れたので、彼はその者に50 (ディルハム) 銅を取らせた。それからそれに続いて1人の貧者が来て路銀を求めたので、彼はその者に300ディルハムを取らせた。私にも300ディルハムを取らせた。それからまた別の物乞いがやって来たので、彼はそれに驚き、会計係に「今日はこれまでにいくらが

出て行ったか」と聞いた。時は正午だった。すると [会計係は] 「900ディルハムです」と言った。彼は私に向き直り、こう言った。「見よ。正午までに私から900ディルハムが出て行った。日没までにはいくら出て行くことやら。おかげさまで毎日がこのとおりだ」と。[*Badr/S*: 171b]⁴⁰⁾

ここでアイニーは、Jarkas の物惜しみしない寛大さを諧謔混じりに描いているが、注目すべきはアイニーもまた物乞いたちとともに、Jarkas から金を恵んでもらっている点であろう。Jarkas は、アイニーの師でありバルクーク学院の長老であるサイラーミーの没後、アイニーに対して「新しいシャイフが来れば、お前にはいいことがある」と語りかけたとの逸話も伝えられるが、その後アイニーを妬む者の讒言により、「私と彼の間にあった友情の絆は断ち切られた」という。そして790/1388年にアイニーは Jarkas によって、学院から追放されるのである⁴¹⁾。

2の Sūdūn al-Ṭuruntāy は、アイニーのダマスカス滞在時代の保護者であったと見られ、アイニーは、794/1392年にダマスカスへ赴任する日に面会したというエピソードを伝えている。さらに Sūdūn は前述

のとおり、アイニーをムフタスイブのみならず、ダマスカスの大カーディーにまで抜擢するつもりであった[Badr/S: 198b]。

3のJakam min 'Awdは、801/1399年にアイニーが初めてムフタスイブ職に就く際に「働きかけた(sa'ā)」人物である。バルクークの子飼いのザーヒリーヤ軍団出身のJakamは、ナスイル・ファラジュ治世初期に急速に力を得たアミールの1人であったが、804//1401-02年にファラジュに反旗を翻して職を解かれ、シリア地方に左遷される。その後809/1406年にはアレppoでスルターン位を僭称するが、同年に戦死し、二度とアイニーとまみえることはなかったようである。アイニーは自著中のJakamの死亡録において、

彼はダワーダール職にあってカイロにいた頃、私(アイニー)のことを生涯かけて離さないと言ってくれたが、[実際には私を]つなぎ止めることも、つなぎ止められることもなかった。彼は正義と公正を愛したが、その人生の最期において多くの血を流してしまった。[Iqd/Q: 1/86b; Badr/BN: 80b]

と述べており、両者の親密な関係がうかがえる⁴⁾。

4のQalmaqāyについて、アイニー自著中の彼の死亡録には彼の美德として、「諸国からたどり着いた異邦人をもてなし、貧者たちに施しをしていた」ことを挙げているが、アイニー自身も彼にもてなされた異邦人の1人であったことが示唆される。また、「彼こそが、私のことをザーヒル王バルクークに知らせ、私と彼とを会わせてくれた人物であった」ともあり、アイニーがこのQalmaqāyを通じてバルクークの知遇を持ち得たことが知られる。

また、以上の例とは反対に、アイニーから利益を得ていたアミールとしては、法学書の献呈を受けた7、ハディースの講釈を受けた8の例がある。

以上、アイニーと交流があったアミールたちを見たが、アイニーはアミールたちから金銭の「施し」や官職への「働きかけ」を受け一方で、イスラーム的知識を提供するという、互酬関係を築いていた。もちろん、これらがアイニーと交流のあったアミールのすべてではなく、特別にアイニーとの関わりが深かった、あるいは高位に達したがゆえにアイニーが書きとめ、同時代史料に書きとめられたにすぎないということも十分考慮すべきである。しかしこれらの限定的な情報からも、以下のことは指摘することができよう。

これらの者は、Jarkasを除けば、全員がバルクークの子飼いマムルーク軍団ザーヒリーヤの出身であった。

その点においては、先に見たアイニーと関わりの深いスルターンたちとも共通する特徴である。これらのうちの何名かは、アイニーがザーヒリーヤ学院にいた時期に知り合ったと考えられ、アイニーにとって同学院のスーフィーとしての勉強時代は、その後の政治的キャリアに有用な人的ネットワークを構築するための準備期間でもあったことがうかがえる。

では、バルクーク学院滞在時代のアイニーが、いかにしてこれらのアミールたちの知遇を得たのであろうか。とくに、当時すでに高位のアミールであったJarkasと、一介の学生に過ぎなかったアイニーとの間に、どのようなきっかけがあり得たのであろうか。ここで、Jarkasの出自について記した史料をみるならば、彼が「トリポリのトルクメン出身である」という点が注目される。アイニー自身はトルクメンではなかっただろうが、彼の生まれ育ったインターブでは、日常的に都市民とトルクメン遊牧民との接触があった。したがってアイニーとJarkasとの間には、言語的・地縁的な近親性が存在していたと推測できるのである。

5. おわりに

本稿で見たアイニーの役職・官職の経歴は、以下のようにまとめられる。ワクフ施設での役職については在任期間などがいまいなケースもあるが、3つの著名な学院での在職が確認できた。政府から与えられる官職については、ファラジュ期の14年間の無官職時代を挟みつつ、3つの官職を歴任していた。特にシャイブ期以降、バルスパーイ期を頂点として、途切れることなく官職に就いており、晩年に当たるジャクマク期でもムフタスイブとアフバース監督を兼任していることは注目に値する。

支配エリートとの関係を見るならば、バルクークの同僚アミールであるJarkas、およびバルクークの子飼い集団であるザーヒリーヤ軍団の出身者との関わりが深い。これらアミールたちの一部との交わりは、アイニーが学生としてカイロに滞在していた時期に培われたと推測されるが、このことは、アイニーがウラマーとしての名声を確立する以前に支配エリートとのコネクションを形成していたことを意味する。彼らとの間でトルコ語を介したコミュニケーションが行われていたことは、想像に難くない。その一方で、タタルらへの法学書の翻訳・献呈や、バルスパーイに対する歴史講話のエピソードと考え合わせると、アイニーはアラビア語によって習得したイスラーム的知識を、支配エ

リートのためにトルコ語でわかりやすく提供することによって、自らの地位を高めていたと言える。いずれにせよ、アイニーのトルコ語運用能力が彼の職業的キャリアの形成に有利に働いていたことは明白である。

とはいうものの、アイニーの出世・昇進の原因を、彼のトルコ語運用能力のみに求めるのは正しくない。そもそもアイニーがハディースや歴史を中心としたイスラーム的学識を評価されてウラマー社会での名声を高めていたのは、前稿で見たとおりである。歴代のスルターンたちの中には、アイニーの若年時代から面識のあった者は確認できず、いずれもアイニーがすでに名声を獲得した後に知り合い、各官職に抜擢していたものと思われる。またアイニーが知識を伝記や年代記として表現する際には、もっぱらアラビア語を用いて執筆活動を行っていた点も見逃してはならない⁴³⁾。アイニーの社会的成功は、何よりもアラビア語によって獲得した学識が基盤となっており、トルコ語はあくまで副次的な要因であったと言えよう。

前稿ではアイニーの学問的キャリアを、本稿では職業的キャリアを分析したが、ウラマーとしてのアイニーがいかにして知識を獲得し、行使していたのかをつぶさに見ることができた。アイニーのライフコースを、他のウラマーと比較し検討することは今後の課題として残されている⁴⁴⁾。さらに、アイニーの没後にアフバース監督職に就いた息子の‘Abd al-Raḥīm b. Maḥmūd al-‘Aynī, その息子でマムルーク朝末期に財務官僚となった Aḥmad b. ‘Abd al-Raḥīm, Ibn al-‘Aynī の存在が示すように、アイニーが次世代に向けてアイニー一家の家門形成を企てていたとの見方も可能であるが、これについては稿を改めて論じたい⁴⁵⁾。

【付記】

本稿は、科学研究費補助金・若手研究 (B) 「中世後期アラブ世界の書物・図書館・読書」(2012-2015年度, 課題番号24720331) の成果の一部である。

注

- 1) 中町信孝「バドルディーン・アイニーの学問的キャリア：マムルーク朝ウラマーの一事例」『甲南大学紀要』文学編159歴史文化特集 (2009), pp. 51-71. 以下、「学問的キャリア」と略す。
- 2) アイニーに関する歴史文献学研究についてはとりあえず、中町信孝「アイニーに4年代記の成立年代とその執筆意図」『西南アジア研究』65 (2006), pp. 41-55 (以下、「4年代記」と略す) を参照。
- 3) たとえば2013年5月, アイニーの出身地であるトル

コ共和国のガジアンテプ (アラビア語名アインターブ ‘Ayntāb) において, アイニーについての国際シンポジウムが開催されたが, そこで行われたプレゼンテーションの大半はハディース学研究者によるものであった。Recep Tuzcu ed., *Uluslararası Bedruddin el-Ayni Sempozyumu ve II. Hadis İhtisas toplantısı*, Gaziantep: Gaziantep Üniversitesi İlahiyat Fakültesi, 2013.

- 4) 中町「学問的キャリア」pp. 53-55.
- 5) Saleh Lamei Mostafa, *Madrasa, Hānqāh und Mausoleum des Barqūq in Kairo: mit einem Überblick über Bauten aus der Epoche der Familie Barqūq*, Glückstadt: Verlag J. J. Augustin GMBH, 1982, pp. 128-129.
- 6) 中町「学問的キャリア」p. 66.
- 7) Ayman Fu‘ād Sayyid, *Al-Kitāb al-‘Arabī al-Makḥṭūṭ wa-‘Ilm al-Makḥṭūṭāt*, Cairo: al-Dār al-Miṣriyya al-Lubnāniyya, 1997, vol. 1, pp. 254-255 参照。
- 8) ‘Abd al-‘Alīm Fahmī, *Al-‘Imāra al-Islāmiyya fī ‘Aṣr al-Mamālīk al-Jarākisa (‘Aṣr al-Sultān al-Mu‘ayyad Shaykh)*, Cairo: Wizārat al-Thaqāfa, al-Majlis al-A‘lā li’l-Āthār, p. 142. 五十嵐大介「中世エジプトの寄進文書」『アフロ・ユーラシア大陸の都市と宗教』(研究双書50, 中央大学出版部, 2010) p. 216 にはこの施設の「スタッフ」(役職)と給金等の一覧表がある。
- 9) マフムディーヤ学院については *Khiṭāṭ*: 4/592-593, ムアイヤディーヤ学院については *Khiṭāṭ*: 4/343. 当時のカイロにおける主な教育・研究機関については, Carl Petry, *The Civilian Elite of Cairo in the Later Middle Ages*, Princeton: Princeton University Press, 1981, pp. 327-341 にある付録1「主な機関に関する分析」を参照。
- 10) マフムディーヤ学院のワクフ規定については Sayyid, *Kitāb al-‘Arabī al-Makḥṭūṭ*, vol. 1, pp. 254-255, ムアイヤディーヤ学院については Fahmī, *Al-‘Imāra al-Islāmiyya*, p. 144 を参照。
- 11) Laila Ibrahim and Bernard O’Kane, “The Madrasa of Badr al-Dīn al-‘Aynī and Its Tiled Mihrāb,” *Annales islamologiques* 24 (1988) は, バドリーヤ学院の遺構を分析した研究である。同学院のミフラーブ等の建築様式に, アイニーの出身地であるアナトリア地方の影響が見られるとの指摘は, 彼の文化的背景を考える上で興味深い。
- 12) *Badr/BN*: 99a. 弟シハーブッディーンによる写本書き込みの史的価値については, 中町信孝「マムルーク朝期の非著名知識人のライフコース：アフマド・アイニーに関する事例研究」『東洋史研究』70: 4 (2012), pp. 33-42 (以下, 「非著名知識人」と略す) を参照。
- 13) 黄金のドームについては *Badr/BN*: 147b 参照。シャイフのワクフからの支援金については, Fahmī, *Al-‘Imāra al-Islāmiyya*, p. 151; 五十嵐前掲論文 pp. 214-215.
- 14) マクリーズィーの『エジプト地誌』にはバドリーヤ学院のことが記されておらず, 従来の研究はこれをマクリーズィーのアイニーへの敵対心由来のものとして

- 説明してきた。Ibrahim and O’Kane, “The Madrasa,” p. 254. しかし、マクラーズィーが『エジプト地誌』の執筆を開始したのが819/1417年であることを考えるなら、その時点までバドリーヤ学院は規模の小さな施設であり、それゆえにマクラーズィーが書きとどめなかったとの可能性もある。
- 15) 中町「4年代記」pp. 42-43 参照。
- 16) 中町「非著名知識人」p. 56.
- 17) 菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブ：出身階層と経歴を中心に」『東洋学報』64：1-2 (1983), pp. 156-165.
- 18) 菊池前掲論文 pp. 138-139.
- 19) Aytamish al-Asandamurī al-Bajāsī (d. 802/1399). スルターン・バルクークの配下のアミールであり、ファラジュ治世初期にはアターバクとして一時権力を握った。*Sulūk*: 3/502; *Manhal*: 6/143-151; *Ḍaw’*: 2/324.
- 20) Sūdūn al-Dawādār, qarīb Barqūq (d. 803/1401). バルクークの姉妹の孫にあたる。上述アイタミシュ失脚後に大ダワダール、シリア総督を歴任するが、ティムール軍との戦いに敗れて死亡。*Sulūk*: 3/1072; *Manhal*: 6/111-115; *Ḍaw’*: 3/284.
- 21) Anne F. Broadbridge, “Academic Rivalry and the Patronage System in Fifteenth-Century Egypt: al-‘Aynī, al-Maqrīzī, and Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī,” *Mamluk Studies Review* 3 (1999), p. 90.
- 22) この時期の物価高と民衆の食料騒動については、長谷部史彦「14世紀末—15世紀初頭カイロの食糧暴動」『史学雑誌』97：10 (1988), pp. 20-23, 28-29, 31-32. シャイフによるムフタシブ業務介入については、菊池前掲論文 pp. 143-144.
- 23) *Iqd/Q*: 1/255 には、シャイフの語りとして「そなたはナースィル期に2度、ムフタシブ職を務めたと聞いた」とある。上表のようにアイニーは、ナースィル・ファラジュ期には3度ムフタシブに就いており、ここでの「2度」との表現は、シャイフの認識の誤りなのか、あるいは2度目のムフタシブ職があまりにも短期間であるために正規の就任と認められていなかったのかは分からない。
- 24) Muḥammad b. Muḥammad b. ‘Uthmān b. al-Bārīzī (d. 823/1420). スルターン・シャイフの腹心であり、官僚職のトップである書記長職を勤めた。*Sulūk*: 4/545; *Manhal*: 11/7-10; *Ḍaw’*: 9/137.
- 25) 「カイロ」と「フスタート」のムフタシブについては、菊池前掲論文 p. 133 参照。
- 26) Takao Ito, “Aufsicht und Verwaltung der Stiftungen im mamlukischen Ägypten,” *Der Islam* 80 (2003).
- 27) *Idem*, pp. 63-64.
- 28) また伊藤によれば、この時期の大カーディー就任者90名のうち、先任の大カーディーと親族関係を有するものが29名もあり、当時の大カーディー就任のもっとも大きな要因であったことが指摘されるが、アイニーの場合はそのような親族関係は確認されない。伊藤隆郎「14世紀末—16世紀初頭エジプトの大カーディーとその有力家系」『史林』79：3 (1996), pp. 5-7, 16 参照。
- 29) Broadbridge, “Academic Rivalry,” p. 98 を参照。
- 30) ‘Abd al-Raḥmān b. ‘Alī b. ‘Abd al-Raḥnān al-Tafahmī (d. 835/1431). *Manhal*: 7/191-194.
- 31) 先に見た、バドリーヤ学院の完成がこの不遇の無官職時代にあたっている点は、いささか奇妙に思える。アイニーはいかにして学院の建設費用を賄い得たのか。上述の通り、この学院がシャイフ期以前には極めて小規模なものであったということも考慮すべきであるが、ファラジュ期のアイニーの経済活動については、弟シハブッディーンによる金銭支援を受けていた可能性もありうる。中町「非著名知識人」p. 61 参照。
- 32) *Ḍaw’*: 10/134-135. 現存する2つの伝記は、シャイフ伝『ムアイヤド王の伝記におけるインドの剣』: *Al-Sayf al-Muḥannad fī Sirat al-Malik al-Mu’ayyad*, ed. Fahīm Muḥammad Shaltūt, Cairo: Dār al-Kātib al-‘Arabī, 1966-67, タタル伝『ザーヒル王の伝記における輝く庭園』: *al-Rawḍ al-Zāhir fī Sirat al-Malik al-Zāhir*, ed. Hans Ernst, Cairo: Dār Iḥyā’ al-Kutub al-‘Arabiyya, 1962 である。
- 33) 君主に捧げられた伝記については、Peter M. Holt, “Literary Offerings: a Genre of Courtly Literature,” *The Mamluks in Egyptian Politics and Society* (eds. Ulrich Haarmann and Thomas Philipp, Cambridge: Cambridge University Press, 1997) 参照。
- 34) なお Holt は、アイニーによるシャイフ伝中の記述がヒジュラ暦815年から819年までとシャイフの治世の前半のみしか含んでいないことを、アイニーがシャイフ治世の後半に寵を失ったためであると記しているが、上にみたとおり事実はそれとは逆であり、単にこの作品がシャイフ治世の中頃に完成していたことを示すにすぎない。Holt, “Literary Offerings,” p. 10.
- 35) *Iqd/Q*: 2/429-433. この遠征中、アイニーは一時行軍から離脱し、当時シャーフィイー派大カーディーであったイブン・ハジャルとともに、郷里アインターブやアレppoに行くことを許されている。Broadbridge, “Academic Rivalry,” p. 99 参照。
- 36) *Nujūm*: 15/111. Broadbridge, “Academic Rivalry,” pp. 96-97 参照。
- 37) 中町「4年代記」pp. 51-54 参照。
- 38) Carl Brockelmann, *Geschichte der arabischen Literatur*, Leiden, 1891-1949, S2, p. 51.
- 39) Fol. 76a. マムルーク朝の歴史の中で、「トルコ人（ここではマムルークの第一世代を意味する）」出身のスルターンは、ムイッズ・アイバクから数えてジャクマクが12代目にあたる。
- 40) 本文中の「ḥaydarī の」は意味が取れなかった。なお、*Badr* の異本である Īmān ‘Umar Shukrī, *al-Sultān Barqūq Mu’assis Dawlat al-Mamālik al-Jarākisa: min Khilāl Makhtūṭ ‘Iqd al-Jumān fī Ta’rīkh Ahl al-Zamān li-Badr al-‘Aynī* (Cairo: Maktabat Madbūlī, 2002), pp. 262-263 にもこれと同様の記述があるが、「私にも300ディルハムを取らせた。」との一文を欠いている。
- 41) *Badr/S*: 137b-138a. 中町「学問的キャリア」p. 66

参照。

- 42) アイニーの弟アフマドも、Jakam との交流があった。中町「非著名知識人」p. 53.
- 43) ただし、サハーウィーによるアイニーの著作リストの中には、『ペルシア王の歴史 (*Ta'riḫ al-Akāsira*)』すなわち『シャー・ナーメ (王書)』を「トルコ語で (bi'l-Turkiyya)」で著したと記されてもいる [Daw': 10/134]。この本の現存は確認されていないが、このことはアイニーがトルコ語のみならずペルシア語にも通じていた可能性を示唆するとともに、マムルーク朝宮廷におけるペルシア＝トルコ語圏文化の影響の大きさをうかがわせる希有な事例である。なお、マムルーク朝時代における『シャーナーメ (王書)』のキプチャク・トルコ語訳としては、Ananiasz Zajaczkowski ed., *Turecka Wersja Sah-Name z Egiptu Mameluckiego*, Warszawa, 1965 を参照。同書の書評は *Journal of the*

American Oriental Society 90: 2, pp. 277-280 にある。

- 44) ウラマーの個人史研究には豊富な蓄積があるが、中町「非著名知識人」に見られる「劣ったウラマー」としてのアフマド・アイニーの事例は、学修期間や師の数の多寡、役職経験の有無、執筆した歴史書とその講話(説教)の対象となる社会層の高低などにおいて、本研究で見た兄アイニーの事例と相似形をなしており、興味深い。
- 45) 中町「非著名知識人」p. 63 注(48)参照。なおアイニーの孫の Ibn al-'Ayni は、現在カイロのタハリール広場から南に延びるカスル・アル・アイニー通りの名祖としても知られている。Ḥasan al-Bāshā, *Mawsū'at al-'Imāra wa'l-Āthār wa'l-Funūn al-Islāmiyya*, Cairo: Awrāq Sharqiyya li'l-Ṭibā'a wa'l-Nashr wa'l-Tawzī', 1999, vol. 1, pp. 391-394 参照。